

■今月のメッセージ (2011年8月)

日本銀行富山事務所長

水上 誠一

なでしこジャパンの快挙に鳥肌が立ちました。1995年のベスト8が最高だった日本のワールドカップ決勝戦は、日本人にとって「永久保存版」として価値あるものとなりました。

「サッカーは心理戦です」とは米国選手のコメントですが、前半における米国の猛攻と苛立ち、後半先制点の後の勝利の確信感、等々、心理戦という割には、米国選手の心理の動きがストレートに分かってしまう展開でした。それだからこそ、応援する日本人も心理が揺さぶられ、実質4点目くらいに感じた後半1点目で「やっぱりだめか」と弱気になった人も多いかと思います。そのとき、なでしこジャパンの間で交わされた会話が「このくらいの方が楽しいね」と聞いて、実に驚きました。「土壇場に弱い日本人」というフレーズをこれまで何度聞かされたか分かりません。それを覆したのは、決勝戦を戦える素直な喜びと、準備としてやるべきことをやってきた自負だったのでしょう。

なでしこのキャプテンが、昨年6月のインタビューでこう発言しています。「(北京五輪の3位決定戦で)負けて悔しかったけれど、自分の中で『やりきった感』があったので、悔いは残らなかった。」また、若くして渡米した経験から「(米国の選手には)点で合わせるパスなどは全然ないし、身体能力で1対1で取っていく。」と分析し、「身体能力と日本の技術・戦術が加われば、絶対に世界一になれると思います。」と断言していました。この間の各選手のフィジカル・トレーニングの真剣さは半端じゃなかったようで、今回の決勝戦でも勝利そのものよりも厳しい基礎訓練に裏打ちされた「やりきった感」に皆が感動しました。

この勝利によって、日本人である以上、強みである「日本の技術・戦術」というメリットを信じ、足らざるところを補う努力を怠らなければ結果が出せる、という強烈なメッセージをもらえたと思います。海外で活躍する日本人については、以前はやや欧米にすり寄って無理に同化しようとした感がありましたが、最近の方が異口同音に言われるのが、「日本人であることのメリット」です。例えば、欧州の有名楽団のコンサートマスターになった方は、ソロ活動をしていたときとは違って、オーケストラには本当に様々な考え方の人がおり、これまた様々な個性の指揮者との間を取り持つ役割が相当大きいようで、こうしたときこそ日本人でよかったと感じるとのことです。また、コンフリクトフリーの(紛争地域以外から産出された)宝飾品で世界的に著名な方は、宗教による偏りのない日本人だからこそ、国際的な交渉がスムーズにいったと述懐しておられました。

今回印象に残った言葉の一つに、準決勝前に監督が言った「金メダル獲得は選手が決めたことで私たちの役目はそれをサポートすることです。」があります。「学ばない子どもたち、働かない若者たち」(内田樹「下流志向」)が増え続ける日本で、日本人であることを意識し、目標を立て達成する快感に目覚める若者が現れ、増加に少しでも歯止めが掛けられたとすれば、これこそ大変な経済効果だと思います。なでしこジャパン、有難うございました。